Osaka Shoin Women's University Repository

「男性身体」としてのプロレスラーの身体表象

学芸学部　被服学科　川野　佐江子

要旨：本論は、プロレスラーの身体を題材にして「男性身体」という概念をいかに捉えたらよいのか、という問いを検討していく研究ノートである。「男性身体」は、「近代パラダイム」あるいは「覇権的なものの可視化されたフォルム（姿）」という位置づけで捉えられる。

まず、プロレスラーの身体がいかに「男性身体」を表象しているかについて検討する。つまりレスラーの身体がいかに「理性」に訴求するように身体加工されているのかということに着目する。次にプロレスとは、二項対立構造や権威的ヒエラルキー制度の中で展開されているのだということを指摘する。続いて、プロレスのスペクタクル性について指摘し、「男性身体」との関係を述べる。最後にレスラーのアイデンティティについて触れ、それが「男性身体」を変容させる可能性をもつという仮説を立てて本論は閉じられる。

キーワード：男性身体、プロレスラーの身体、覇権性、スペクタクル、アイデンティティ

０．本論における「男性身体」とは何か

本論における「男性身体」の概念とは、すでに拙稿[i]で述べてきたように、近代パラダイムの具現化されたものである。「男性身体」は「男性」と「身体」から成る言葉であるが、なぜ「男性身体」を近代パラダイムの具現化と言うのかといえば、それは次の理由による。一つ目は、近代におけるパラダイムが、男性中心主義に置かれていることが明らかになっていることが挙げられる。フェミニズム理論は、現代社会における男性性の覇権性を明らかにしてきた。それによれば、男性中心主義は、近代知を担うものとして「男性」を無自覚に措定してきた。そして、近代知の外にあるものは「女性」が担うものとして理解してきたのである。言い換えれば、理性的なものは男性が担い、理性的でないものは女性が担うものとされたということである。理性的でないものとは、つまり理性でコントロールできないものであり、具体的には身体の問題や感情の問題などを指している。ヴェヴレン[ii]やジンメル[iii]は、流行現象なども理性的でないとして、女性の問題として扱っている。

そうなると近代パラダイムにおいては、身体の問題は女性が担う概念ということになる。しかし、本論ではあえて「男性身体」を扱う。このことは近代パラダイムからすれば、一見矛盾した二つの言葉を並べていることになる。しかし、近代パラダイムにおいて男性の身体は、男性中心主義によってその“フォルム”を中心に語られてきた、という問題の指摘が二つ目の理由なのである。これはどういうことかと言うと、女性の身体が、セクシュアリティという近代パラダイムからすれば隠蔽するべきカテゴリーで語られてきたこととは反対に、男性の身体は、目に見える公的なものとして語られてきた、という問題なのである。モッセが紹介するように[iv]、男性の裸体は、ギリシア彫刻を範とする,理性と美的な調和によって成立する身体フォルムであった。管理が行き届き、無駄や余剰のない肉体が奨励されてきた。つまり、「男性身体」という概念は、「覇権的なものの可視化されたフォルム（姿）」であるというわけである。

１．本論の目的

本論は、上述の「男性身体」という概念を、プロレスラーの身体を題材に検討していこうとしている。その検討を通して、近代パラダイムの絶対性に対して、ある種の疑義を提示しようとする研究ノートである。

１．１．なぜプロレスラーの身体なのか

プロレスは「ジャンルの鬼子」と呼ばれるほど、定義付け困難な文化的領域といわれる。（小林正幸2002[v]）

小林によれば、プロレスを定義しようとすると、

Osaka Shoin Women's University Repository

「“スポーツか否か”、“真剣勝負か八百長か”、“格闘技か否か”、“単なる娯楽か否か”、“メジャーかマイナーか”、あるいは“芸術か否か”という問いを訴状してしまう。つまり、我々が生きる世界の論理の正当性の問題として迫ってくるのである。」（小林2002）という。この「我々が生きる世界の論理」とは、まさに「近代を支えるパラダイム」と換言可能である。そして、プロレスを定義しようとすること自体が、すでに言説内に現象を追い込む近代知内の出来事であることもわかるのである。また、小林によって挙げられた定義のために対比された二項は、「A or B」ではなく、「A or no A」であることに注目しておきたい。これは、近代パラダイムですでに言説化された「A」と、言説化できていない「no A」という区分でもある。一般的に言えば、「理解できるもの」と「理解できないもの」という区分と言えるだろう。この場合の「理解できないもの」は「out of knowledge」と言い換えできる。つまり、知識の外にあるもの、言説化できないものを指す。このことからわかるのは、プロレスは、言説の内側にあるのか、外側にあるのかを、常に問われながら存在してきた、ということである。

プロレスがそういう問われ方をしてきたということは、プロレスラーにも同様の視線が向けられて来たといえる。一般にプロレスといえば、プロレスラーがその身体を使って行う格闘技を指すのであるから、その主題は当然のことながらプロレスラーが担うことになるだろう。そこで本論が注目したいのは、プロレスラーのその身体についてなのである。

プロレスラーの身体は、プロレスが問われてきた「A or no A」への問いと、その問い自体をいかに問い直すか、という二重の問いを、提示してくれる。格闘する身体は、近代パラダイムの視点からは「男性身体」であり、鍛え上げられた筋肉や、強さや大きさは、常に肯定的意味をもってその「男性身体」を装飾している。半裸の肉体は、公然の肉体として観衆の前に提示されている。しかし、格闘すること自体がそもそも理性的と言えるのか、鍛え上げ作り上げた肉体はむしろ不自然な肉体なのではないのか、などの逆説的な問い返しを、常にはらんでいるのである。

そこで本論は、さらに具体的に近代パラダイムの抱える問題をプロレスラーの身体に結びつけて検討していくために、特にWWE（World Wrestling Entertainment）[vi]というアメリカのプロレスリング団体に所属しているレスラーに注目して検討を行っていく。WWEでは、自らの興業をプロレスPro-Wrestlingとは呼ばず、「スポーツ・エンターテイメントsports entertainment」と称しており、その興業内容も、高度なレスリングの格闘技術を見せるだけに止まるものではない。そこではレスラーがそれぞれギミックgimmickによってキャラクター設定をされており、その役回りを現実のことのように演じることで、ストーリーを持ったレスリングがリング上で展開されている。また、ロッカールームでもそのストーリーはつながりをもって展開され、観衆に対し、さも楽屋を覗いているかのように公開されるのである。そして観衆は、その連続して展開されるストーリーを追いながら、現実と虚構が混在したエンターテイメントを楽しむのである。

WWEのレスラーの身体を取り上げることで、「“スポーツか否か”、“真剣勝負か八百長か”、“格闘技か否か”、“単なる娯楽か否か”、“メジャーかマイナーか”、あるいは“芸術か否か”という問い」と、その問いの立て方自体がどのような構造からなっているのか、を検討することが可能となる。

まずは、プロレスラーの身体について、「男性身体」の具現化である側面から見てみたい。

２．近代パラダイムの象徴としてのプロレスラーの身体

２．１．裸体

多くの場合、プロレスラーはほとんど裸体でレスリングを行う。レスリングは、肉体同士の間の格闘議であり、武器や道具を持たないことがルールとして規範となっている。したがって、裸体であることは、まさに丸腰であることの証明であるのだ。裸体は、近代パラダイムからすれば、自分ではどうにもならない「理性の外」にあるものであった。しかしひとたび「裸でいることが、正しい」という規範の下では、その裸体は「野生」から一気に格上げされて「正義」とされる。

またさらに、「野性味」を取り除く努力として、さまざまな加工が施されているのが、プロレスラーの身体である。最初に注目されるのは、その筋肉である。先に、近代パラダイムにおける理想的な身体フォルムは、ギリシア彫刻であると述べた。美と調和を保ったフォルムは、そこまで作り上げる肉体の自己管理が必要である。つまり、そのフォルムは、自己と自己の肉体を正しく管理し維持できる理性的な人間であるという証明になるのだ。また、筋肉は力強さの証明でもあ

Osaka Shoin Women's University Repository

る。男性に強さと逞しさが要求される近代パラダイムにおいて、筋肉は「男性」の象徴つまりは「覇権」の象徴であると言えよう。

次に、その裸体は脱毛とタンニングが施されていることが多い。まず脱毛についてであるが、先にレスラーの体毛は、頭髪か髭に限定されることが多いということを述べておきたい。あるいはギミックで体毛を強調するレスラーもいる。胸の体毛は古典的な「男らしさ」の善玉的（ベビー）ギミックになるが、背中まで体毛に覆われるようなレスラーは、たいてい悪役（ヒール）で怪物的なギミックを与えられているケースが多い。

さて、レスラーの脱毛についてであるが、これは一つの身体加工であると言える。つまり、もともと人間の皮膚に備わっていた体毛を除去してしまうことで、これ以上のない「丸裸」に「加工」してしまうというわけである。しかし、皮膚を露わにしてしまうこの脱毛行為は、一方で「丸裸」の隠蔽にもなっている。つまり、本来は体毛があることが裸体の「自然な状態」であるわけであるが、脱毛行為によって「自然な状態」の裸体とは一線を画す、別な「不自然な状態」の裸体へと加工してしまっているのである。ここでは「不自然な」裸体によって、「自然な」裸体はどこかへ隠されてしまっているのである。しかしこの「不自然な」裸体は、理性によって加工された正しい自然な身体として近代パラダイムによって認識される。人間の生々しい野生の部分を除去することで、公的身体として公共の場に登場できる裸体になるのだ。

次ぎにタンニングであるが、WWEのレスラーのタンニングは、非常に美しく施されている。

図１　脱毛とタンニングを施したWWEのプロレスラー（ランディー・オートン）

ルドフスキー[vii]は、「よく陽灼けした人物は、陽灼けしていない人物よりもよくみえるし、少なくとも健康にみえる。たとえその陽灼けのしかたが均等でなく、身体中まばらであった場合でさえそうなのである。」（ルドフスキー　1971=1979:171）と述べている。ここでは、タンニングの視覚的効果と、一般の陽灼けが「不思議なパターンを皮膚のうえに残してしまう。」（同上:171）ようにムラができるものであることも示している。ところが、レスラーのタンニングは、そのまばらなパターンが見られないのである。タンニング・マシーンの技術も進んでいるのであろうが、タンニング後の皮膚の色が、彼のもともとの皮膚の色であるかのように、仕上げている。そして出来上がった皮膚にオイルが塗り込まれ、ぴかぴかに磨かれるのである。

実はタンニングtanningとは、日焼けという意味として使われることが多いが、もともとは革を鞣すという意味がある。バッグや靴などの革製品の加工方法の一つで、毛皮の毛と脂肪とを除き、タンニン（渋）をつかって革を柔らかく美しく整える一連の作業をtanningと言う。鞣すことで、生物の一部としての皮は、死んだり腐ったりしないモノとしての革へと作り替えられるのである。つまり、レスラーの脱毛－日焼け－オイル塗布という一連の皮膚加工の工程は、まさにこのタンニングの工程と同義であることがわかる。換言すれば、レスラーは自分の皮膚を「革」へと変質させるべく鞣し、加工し、仕上げていると言うことになる。脱毛とタンニングは、レスラーの身体をつつむ表層を、生身の皮膚から切り離して、「不自然」ではあるが「管理された」人工の、モノとしての表皮に替えるのである。

脱毛とタンニングは、筋肉の動きの細部まで観察することができるという効果のほか、つるんとした皮膚感が、生身の皮膚をして彫像のような印象―それはまるで人工の皮膚のように―という視覚的効果をわれわれに与える。加えて、タンニングの効果とオイルの効果によって、肉体はブロンズ像が光るように磨かれて、まるで生身の人間ではないような印象さえ与える。“美しく”体毛を刈られて整えられた「不自然な」人工の肉体で、ＷＷＥのスーパー・スターと呼ばれるレスラーの身体になるのである

そして、これらプロレスラーの身体は、同時に脱-性化されている身体である、と言えるであろう。先に述べたように、性的なものは女性が担うものとしてきたのが、近代パラダイムであった。自分ではコントロールできないものとしての性的な部分を、自己の手中で管理し、いかに身体から排除するのかが、人間

Osaka Shoin Women's University Repository

（man）にとっての課題であった。性的なものは、常に近代パラダイムによって隠蔽されてきたことは、すでにフーコー[viii]も述べている。男でもなく女でもない一つのオブジェとしてのフォルムでなければ、公共の場に提示できるはずもない。近代パラダイムからすれば、プロレスラーの身体は、公的身体であらねばならないのだ。

以上のように、プロレスラーの裸体について検討した結果は次の通りである。

まず、プロレスラーの裸体は、正義に基づく身体であること。つぎに、力や強さが強調される身体であること。つぎに、理性によって管理された身体を求めて、「自然」でなまなましい身体部分から距離を置くように「加工」されていること。さらにその理性的管理の結果、公的身体として観衆の前に披露できる身体になれること。これらの結果は、プロレスラーの身体が、正義や正しさ、秩序、強さなど、近代パラダイムにおける「男性」が担うべき要素を具現化していることを示している。また、プロレスラーの身体は、わかりやすく視覚的効果を中心に訴えてくるフォルムで提示されていることがわかる。以上のことから、プロレスラーの身体は、近代パラダイムを根拠にした「男性身体」を表象していると言えるのである。

２．２．ベビーとヒール－善玉 vs. 悪玉の構図

近代パラダイムでは、二項対立の構図が論理構造に深く根づいていることは知られている。WWEにおけるベビーとヒール[ix]の抗争ストーリー[x]は、この二項対立構造の最も典型的な形式に乗っ取って展開されている。

図２　ヒール（オートン） vs. ベビー（シナ）

図２はWWEのトップレスラーの２人であるが、左側がヒールのギミックを与えられているランディー・オートン、右側がベビーのギミックを与えられているジョン・シナである。ヒールは伏し目がちにこちらを睨み付け、ベビーは顎を上げてやや微笑みながら自信たっぷりの表情を見せる。あくまでもギミックとして与えられた設定であるが、同年代同士の彼らの抗争劇は、観客にとって非常に分かりやすい。ベビーに声援を送る観客もいれば、ヒールに歓声を上げる観客もいる。どちらに肩入れして観戦するのかは、ここでもまた観客の「好きか嫌いか」の二項からの選択によって決定される。このようにプロレスの展開は、レスラーの善玉性か悪玉性かだけがストーリーを作るのではない。WWEでは、ベビーレスラーやヒールレスラーに向けられる、観客ひとりひとりの好みとしての好きか嫌いか、社会的倫理から見た良いか悪いか、など、いくつもの主体が同時に配置されながら、それぞれの主体がそれぞれの二つの対立軸を作ることで、プロレスが展開されているのである。

ベビーとヒールは、１人のレスラーに対して固定化されているわけではない、というところがWWEの特徴でもある。あるとき突然、それまでベビーだったレスラーが「裏切り」、一気にヒールへと転換する、というストーリーは、むしろWWEの定番ストーリーと言うべきかもしれない。その逆もしかり、ヒールがあるきっかけでベビーへと変貌していく。その変化の様子は、そのレスラーの身体によって明確に表現される。観客はその劇的な出来事の“目撃者”としてその場に立ち会うのである。それまでは、複数の対立する二項があちこちに飛び回っていたが、ギミックの逆転劇の場面では、それまで混乱していた複数の二項が、唯一、入れ替わる二項として集約され、レスラーの身体で可視化されるのである。

したがって、試合を理解する第一の鍵となるのは、レスラーの身体である。（ロラン・バルト1957=2005[xi]）

２．３．タイトル制度

ＷＷＥは、管轄するタイトルを複数持っている。WWE王座、US王座、世界ヘビー級王座、インターコンチネンタル王座のほか、タグマッチ用の王座や統一女子王座である。各タイトルにはその保持者の証としてベルトが用意されている。これら複数のタイトル間における優劣というものは明文化されているわけではないが、権威性の最も高いタイトルはWWE王座であることが了解されている。WWEはWorld Wrestling Entertainmentの略であることからわかるように、WWE自体がすでにworldであることを自称している。従って、WWE内におけるタイトル王座がWWEにとって“真の意味”での世界一ということになる。レスラーたちは、このタイトルの奪取を最終目標にリングに上がっているのである。

Osaka Shoin Women's University Repository

これらのタイトル制度の意味するものは、権威的ヒエラルキー制度の肯定であるといえよう。タイトルが特にプロレスという意味における権威の象徴であることは、次のエピソードからも伺える。

2000年の前後にロックという大変な人気を博したレスラーが活躍した。彼は祖父、父に続いて３代目のプロレスラーであり、その祖父も父もタイトル獲得経験者であった。したがって、WWEとしては血統的にも正当な若きレスラーとして売り出し、結果として彼自身も何度もタイトルを獲得した。その人気はハリウッドが注目するところとなり、彼は俳優業にもその才能を発揮するようになる。ある時期、映画の撮影のために長期間リングから離れた時期があった。そして久々にWWEのリングに帰ってきたとき、観衆は一斉に彼にブーイングを浴びせたのである。熱狂的なファンたちは、プロレスを片手間に、俳優業にいそしむロックを許さなかったのである。ロック自身もこのブーイングには愕然としたと言われている。この後のWWEのストーリーでは、ロックの持っていたタイトルは、売り出し中の新人レスラーに奪取され、ロックは王座陥落ということになった。

つまり、WWEのタイトルは、プロレスそれ自体をWorld Wrestling Entertainmentの世界で権威的に引き上げる役目を担っており、その結果としてタイトルは権威性ヒエラルキーの頂点に置かれることになる。

このタイトル奪取によって、レスラーは、当然のことながら、非常に魅力のある立場になれるわけである。タイトルを奪取すると、そのレスラーには単なる名誉のほかに莫大なギャンティを獲得することができる立場になれるわけであるが、逆に言えば、そう簡単に手に入るものではないことは予想できる。

WWEのタイトル制度が、オリンピック競技などと大きく異なるのは、単に試合を勝ち進めばタイトルを掴めるというわけではないからだ。タイトルを獲るためにはレスリングが強く巧いことは最低条件であるが[xii]、観客の視覚に訴える試合運びや人気、レスラーの個性、WWE経営陣からの興業価値からの評価などの総合的な結果としてチャンピオンが「創られる」のである。したがって、WWEタイトルの獲得は、オリンピックの金メダル獲得とは異なる部分でも非常な困難さがあるわけである。

しかし一方で、このタイトル制度は、非常に合理的な制度であるともいえる。まず、レスラーがなぜ日々格闘し続けなければならないのか、といったプロレス存在の根幹問題を可視化させてくれる。次に、たった一つの王座を頂点に置き、そこから各レスラーたちのWWEにおけるポジショニングを可視化させてくれる。そしてレスラーからすれば、目指すべき目標が明確に設定できる、ということである。

以上のように、近代パラダイムとWWEのタイトル制度を検討すると、WWEのタイトル制度が近代パラダイムのある部分のひな形であることがわかる。それは「創られた権威性」と「合理的な組織形態」に現れている。「創られた権威性」とは、「その根拠の説明は不能だけれど言説化してしまったある種の覇権的なイデオロギー」である。正しいことや、道徳的であること、理性的であること、男性中心であること、などは、換言すれば根拠のないディスクールに過ぎないことがわかる。それと同時に、そのディスクールに向かって制度と規律をもって社会を構成しようとする動きが「合理的な組織形態」である。覇権的イデオロギーを制度で下支えし、保持していこうという動きであり、合理的かつ合目的的である。

以上のことから、WWEのタイトル性もまた、近代パラダイムの典型的様相だといえるのだ。

３．近代パラダイムのパロディとしてのプロレスラーの身体

これまで、プロレスラーの身体を巡る近代パラダイムの象徴的な部分について検討をしてきた。しかし、この近代パラダイムには、それが過剰に発揮されるとむしろ近代パラダイムに抗するものが出現するという宿命を持っている。この宿命性について、レスラーの身体を使って検討していく。

３．１．スペクタクルな身体

ロラン・バルトの『現代社会の神話』「プロレスする世界」の冒頭では「プロレスの美点は、それが過度なスペクタクルということである。」と記述がある。バルトも指摘しているように、「プロレスが提示する身振りは、その意味作用が頂点に至るまで活用された、過度の身振りである。」とされ、「この誇張の機能はまさしく古典劇のものと同じである。」と論じられている。

プロレスラーの身体に現れる過剰な誇張は、かれらの身体に表象される近代パラダイムに対しても向けられる。この件の具体例として、ストーンコールド・スティーヴ・オースチンというレスラーを挙げておく。

Osaka Shoin Women's University Repository

３．１．１．スティーヴ・オースチンの身体

オースチンは、先述のロックと同年代である90年代後半から00年代前半を中心に人気を博したレスラーである。ロックとの抗争劇は当時の大人気カードであった。オースチンに与えられたギミックは、彼が気に入らないものは権威的なものであれ何であれ、すべてを破壊する、という激しい暴力性であった。彼はたとえWWEのオーナー[xiii]に対してであっても、気に入らなければリング上で叩きのめす、というパフォーマンスを演じ、理性や秩序、権威性といった近代パラダイムの価値基準の根底を、その身体で破壊するレスラーとして、観衆から絶賛された。その一つ現れに、後にオースチンの代名詞となる「Austin 3:16」という彼の発言があるので、紹介しておく。

ジェイク・ロバーツというスター・レスラーが実生活で薬物中毒になり、ヨハネ福音書３章16節[xiv]の神の言葉で薬物を断ち切った、という実話がWWEにはあった。この後、ロバーツは敬虔なクリスチャン・ギミックで再びWWEのリングに復活し、ファンからも喝采を浴びた。ところがオースチンは、復活したロバーツを嘲笑し、「ヨハネ福音書３章16節なんて知らないけれど」の後に、「Austin 3:16 says, I just whooped your ass!」と叫んだのであった。

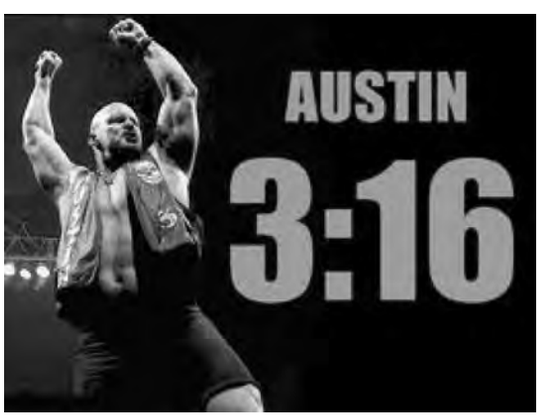

図3　ストーンコールド・スティーヴ・オースチン

この“事件”について小林は次のように論じている。

「Austin 3:16 says, I just whooped you[xv] ass!」とストーンコールド・スティーヴ・オースチンが叫んだとき、彼は西洋世界の構造化をもたらす価値規範を完全にパロディ化し、その身体には西洋世界の不可視の悦びが顕在化したのである。（小林2002）

近代パラダイムを支える倫理や道徳観は、言うまでもなくキリスト教をその基底においている。「Austin 3:16」は、絶対的権威である神の言葉から、その権威性を一気に剥奪してしまう。「Austin 3:16」と叫んだオースチンの身体は目に見えているが、近代パラダイムの外側に存在する「Austin 3:16」は、近代パラダイムの内側からは決して見ることができない。見えないものを覗きたくなるのは、バタイユの言うところの「禁止への侵犯」であり、この欲望もまた近代パラダイムからすれば排除すべき対象なのである。つまり、絶対的権威性が過剰に働けば働くほど、オースチンの身体ではその権威性をパロディ化し、無効にさせてしまう。絶対的権威性をそれ自体の外側へと追いやるのである。

オースチンの身体は、近代パラダイムをパロディ化させ、その覇権性を失墜させることに成功した。しかし、その後のオースチン自身はどうなったのだろうか。

オースチンの「気に入らないものは全てたたき壊す」というギミックは、オースチンの生の感情を出すというギミックでもあった。その結果、オースチンはリングの外でもWWE幹部と軋轢を起こし、家庭生活も崩壊していく。秩序や理性という近代パラダイムの外へと向かおうとするオースチンの身体は、現実の社会ではとうぜん受け入れがたい存在として残ってしまったのである。

近代パラダイムから可視化される「スペクタクル」な身体は、近代パラダイムの外に出て行ってしまったとたん、近代パラダイムの排除の対象になってしまうのである。「スペクタクル性」は、記号である。また、その記号を乗せた身体と、それを同じパラダイムの内側から読み取ることのできる観客との間に交わされる夢であり、エンターテイメントなのである。

３．１．２．記号の総体

バルトは、『現代社会の神話』のなかで、プロレスラーの身体について次のように述べている。

レスラーの身体は、闘い全体を萌芽状態で含んだ、基盤となるような記号を制定している。（バルト1957=2005:13）

床に押さえ込まれると、大げさにマットを叩いて、すべての人々に彼の状況の耐え難い性質を印象づける。要するに彼が作成するのは、自らの不満をめぐって延々と作り話を続ける気難し屋といった、面白おかし

Osaka Shoin Women's University Repository

いイメージを、彼が正当に体現しているのだと、観客に理解させる目的を持った、諸記号の複雑な総体なのである。（バルト1957=2005:13）

観客に届けられるのは、〈苦痛〉、〈敗北〉、〈正義〉の偉大なるスペクタクルである。（バルト1957=2005:14）

バルトは、レスラーの過剰な苦悶の表情や身振り手振りは、儀式的に執り行われる記号であって、観客は現実のレスラーの苦しみを臨んでいるわけではないと述べる。「観客は図像学上の完全さを味わっているだけである。」とも続ける。この議論を裏付ける具体例として、WWEにおけるプロレス技について触れておく。

敗北の図像学上として、プロレスの動きの中で特徴的なのは、「バンプ」と呼ばれるいわゆる「やられ技」である。相手からの攻撃を受けると、吹っ飛んだり、転倒したり、時には跳ね上がったりする動きである。バンプの効果は、相手の技の強さや大きさを誇張して観客に見せることができ、ショー・アップにつながることにある。それと同時に、その衝撃をかわして身体的ダメージを最小限にすることにもある。最近のWWEのレスラーでバンプの旨さを評価できるのは、リック・フレアーという80年代を中心に活躍し何度もタイトルを獲得して、2008年に引退をしたベテランのレスラーである。彼は、ギミック上はヒールであることが多かったが、長年、視覚的に訴えるプロレスを目指し実践してきたレスラーとして、有名である。たとえば彼は、頭からの流血が目立つようにと、髪を金色に染めているほどである。Nature boyというニックネームを持つ彼のギミックは、理性をなくして暴れ回るラフファイトが有名であったが、実際の彼の技は、基本に忠実で堅実なレスリングに裏付けられていた。したがって、派手な動きや過剰な動作や、あり得ないほど前のめりな倒れ方のバンプなどは、後輩が範とするような身体所作なのである。

フレアーのプロレスキャリアの後半は、彼のバンプでもってWWEの興業に大いに貢献したと言えるだろう。観客は、フレアーの苦悶の表情や、リングの中を転げ回って苦しむ姿などを期待している。フレアーは敗北や苦しみをスペクタクルな記号としてその身体上で表現し、観客に提供するのであった。

図4　関節技に苦悶の表情のリック・フレアー

バルトは、プロレスの技の中では「押さえ込み」よりは「チョップ」の方がよりスペクタクル性が強い形状だと述べている。しかし、筆者は「押さえ込み」の方がスペクタクル性が強い、と考えている。バルトの言う「押さえ込み」とは、プロレスで3カウントのフォールを取るまでの過程を指していると思われるが、実際「押さえ込み」はフォールではなく、ギブ･アップを狙う技も多く含んでいる。筆者は、このギブ･アップを狙う「押さえ込み」である関節技や絞め技にこそ、よりスペクタクル性が現れていると提示したい。

具体的には、関節技の「シャープ･シューター」という技を検討してみよう。

図5　シャープ･シューター

この技は、別名「サソリ固め」などとも呼ばれる。図5にあるように、相手をうつ伏せにし、相手の腰の部分を中心に固定して、交差させた膝を高く持ち上げながら、相手の腰に圧力を加える。

このとき、この技を掛けられているレスラーは、身動きがとれず、腰を不自然に反らされることで、激しい苦痛が生じている。リングのマットに接しているのは、最終的には胸の辺りだけとなり、顎は上がり、相手と自分の体重が首下に集中することで呼吸も困難になる。多くの場合、その苦痛のためギブ･アップを受け入れざるを得なくなる。この技は、腰と脚の関節を拘束して相手の動きを封じるのである

Osaka Shoin Women's University Repository

が、この技を掛ける側も、相当の力技となる。図6からもわかるように、この技の図像は、技を掛けられている方は地面に押し込まれて苦悶の表情をし、掛ける側は観客に強力ぶりをアピールできる姿勢と表情を保てる形になる。

図6　シャープ・シューターを掛けるブレッド・ハート

関節技は、激しいチョップやキックなどと異なり、苦悶や痛みの状況が長時間に渡る技である。逆に言えば、観客はバルトの言う「〈苦痛〉、〈敗北〉の大スペクタクル」を、時間をかけてゆっくりと堪能することが可能となるのだ。日常ではあり得ないほど屈折した身体は、それだけでスペクタクルな身体である。日常ではあり得ない身体的苦痛を、長時間にわたって与え続ける側もまた、「常軌を逸した」スペクタクルな身体なのである。チョップやキックのような一瞬の苦痛との比較は、どちらが理性的でないのか、という問いに結びつく。つまり、どちらが近代パラダイムに抗しているのか、ということと同義なのである。

ところで、スペクタクルな身体が記号の総体であるならば、それは結局、記号理解を前提にした近代パラダイムの世界内の出来事ということになる。したがって、プロレスラーの身体が、スペクタクルな身体である時は、プロレスラーの身体もまた近代パラダイムの世界内にある、ということになる。どれほど近代パラダイムに抗するような荒技を展開しても、それは「〈苦痛〉の記号」として解釈される世界枠からは逸脱しないのである。

3．2．近代パラダイムから逸脱した身体

スペクタクルな身体である限りにおいて、近代パラダイムの枠内であることは、すでに述べた。つまり、プロレスラーの身体はいつまでも近代パラダイムの枠内に留め置かれるということである。しかし、そうなのだろうか。その検討にあたり、ここでは、ギミックというプロレス特有の性格設定について触れておきたい。

WWEのプロレスラーの身体には、少なくとも三重のアイデンティティが共存していると仮定しておく。まず、最も外側にあって、外部から可視化されるための「ギミックとしてのアイデンティティ」が挙げられる。次に、ギミックを設定される「プロレスラーとしてのアイデンティティ」が挙げられる。最期は、そのプロレスラーとしての身体の持ち主である、1人の「個人としてのアイデンティティ」である。この三つのアイデンティティの中で、もっとも近代パラダイムから逸脱可能なアイデンティティは、ギミックの部分であると考えられる。ギミックのアイデンティティは、近代パラダイムを逸脱しても、その身体を保持する個人としてのアイデンティティとは一線を画している。したがって、あるプロレスラーの身体が近代パラダイムを逸脱しても、それはギミックの部分だけであって、同じ身体は他のアイデンティティを呼び出すことで再び近代パラダイムの内側へ戻って来られる。先述したオースチンの身体は、個人としてのアイデンティティがギミックとして採用された不幸によって、ギミックの逸脱性は個人アイデンティティの逸脱を招き、実社会で不幸なことになった。このような実例から、実際に同じ身体上で複数のアイデンティティを切り分けられるのかという問題は検討されなければならない。しかし、本論においては、一つの身体に複数のアイデンティティを保持しているだろうプロレスラーの身体を検討することで、「身体」は近代パラダイムの内と外を現実に往復している、という問いを提示しておきたい。

4．まとめと成果

本論は研究ノートして、近代パラダイムと言い換え可能な「男性身体」という概念を、プロレスラーの身体を題材に検討していこうとした。そのまとめと成果は次の通りである。

まず、プロレスラーの身体は、近代パラダイムの秩序に乗っ取り、公的な「男性身体」のフォルムを保持しようとしていることがわかった。換言すれば、プロレスラーの身体は「男性身体」でなければ、公衆の前に披露することができない、というそもそも近代パラダイムの世界内に存在している、ということがわかった。

つぎに、一見過剰な出来事や行為から構成されているかに見えるプロレスラーの身体は、スペクタクルな身体になることで、より近代パラダイム―つまり「男性身体」で在り続ける、ということが確認された。

成果としては、まず、プロレスラーの身体が、近代パラダイムからの逸脱―つまり「男性身体」からの乖離の可能性を持っているか、という問いを立てたこと。つぎに、その応答は、プロレスラーの身体における複数のアイデンティティへの検討からのアプローチ可能なのではないか、という仮説の設定である。

Osaka Shoin Women's University Repository

本論は研究ノートの位置づけであるため、箇所箇所に議論の余地をふんだんに残している。たとえば、キーワードに対する概念説明の不足や省略、饒舌な部分とそうでない部分が混在するなど、課題を抱えている。とはいえ、これまで研究対象として注目が希薄だった「男性身体」を取り扱い、その方法としてプロレスという題材を用いるという本論は、新たな学問領域の創出に対しても貢献できる視点をもっているものと考える。今後も引き続き、関係資料を精査し研究を深めていくつもりである。　以上

[i] 川野佐江子、2009『消費社会の中の「男性身体」～交錯する「男らしさ」と〈マスキュリニティ〉の行方』、立教大学学位申請論文

[ii] ソースティン・ヴェブレン、1998『有閑階級の理論』（高哲男訳）ちくま学芸文庫

[iii] ゲオルク・ジンメル、1999『ジンメル・コレクション』（北川東子・鈴木直訳）ちくま学芸文庫

[iv] ジョージ．L. モッセ、2005『男のイメージ　男性性の創造と近代社会』（細谷実・小玉亮子・海妻径子訳）作品社

[v] 小林正幸、2002「プロレス社会学への招待　イデオロギーとテクスチュア」『現代思想　２月臨時増刊　総特集プロレス』青土社

[vi] 2001年以前はＷＷＦ（World Wrestling Federation）またはＷＷＷＦ（World Wide Wrestling Federation）という名称であったが、まったく同じ略称のWorld Wide Fund For Nature（世界自然保護基金）に名称の改変を求める訴訟を起こされて敗訴、2002年WWEと改称した。

[vii] バーナード・ルドフスキー、1979『みっともない人体（からだ）』（加藤秀俊・多田道太郎共訳）鹿島出版会

[viii] ミシェル・フーコー、1986-1987『性の歴史Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』（渡邊守章訳）新潮社

[ix] ベビーはベビーフェイスを指し、善玉を意味する。これに対し、ヒールは悪玉という設定である。

[x] 「アメリカでは、プロレスが〈善〉と〈悪〉の間における一種の神話的な闘争であることは、すでに指摘されてきた。」ロラン・バルト、1957=2005、「プロレスする世界」『現代社会の神話』（下澤和義訳）みすず書房

[xi] ロラン・バルト、1957=2005、「プロレスする世界」『現代社会の神話』（下澤和義訳）みすず書房

[xii] 過去のストーリーでは、レスラーでない人物が、その奸策をもってチャンピオンベルトを獲得した、という展開も行われたこともある。当然のことながら、プロレスの権威性が失墜する自体であり、このチャンピオンはヒール中のヒールとしてストーリーは展開された。

[xiii] WWEのオーナーであるビンス・マクマホン氏は、悪徳オーナーというギミックで、しばしばストーリー展開に参加する。

[xiv] 聖書でもっとも有名な言葉とされている。日本語：「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」英語："For God so loved the world, that he gave his only begotten Son, that whosoever believeth in him should not perish, but have everlasting life."

[xv] 原文ママ

【参考文献】

マイケル・Ｒ・ホール、1993『プロレス社会学』（江夏健一監訳、山田奈緒子訳）同文舘
香山リカ、1996『テクノスタルジア』青土社
小田亮、亀井好恵編、2005『プロレスファンという装置』青弓社
斎藤文彦、2008『みんなのプロレス』ミシマ社
スコット・Ｍ・ビークマン、2008『リングサイド』（鳥見真生訳）早川書房